

## 青年期における道徳意識に関する一考察

—L. Kohlberg 理論を通じて—

鈴木 孝・福崎 淳子<sup>\*</sup>

(昭和63年9月27日受理)

### A Study on the Consciousness of Morality in Adolescence

—Based on the L. Kohlberg's Theory—

Takashi SUZUKI and Junko FUKUZAKI

(Received September 27, 1988)

#### はじめに

Kohlberg の道徳理論を通し、まず発達心理学的側面から道徳性の発達段階について人間性の倫理を追究した6段階の思考過程に関し、哲学的側面から7段階目の想定における宇宙的秩序の人間性に関し考察を行なった<sup>1)</sup>。ひき続き前論<sup>2)</sup>では、幼児期に視点をあて道徳性の形成に関し、援助者としてのおとなの姿勢の重要性を論じた。そこでは、子どもをとりまく環境下の刺激要素のひとつとしておとなの存在をとらえ、精神的成長における自然的環境と物質的環境の要としてのおとなの重要性を論じた。

道徳性の形成は、単に時間的経過に伴ない生物学的に成熟するだけではない。さらに「認知能力は道徳性発達の必要条件だが、十分条件ではない<sup>3)</sup>」「道徳的な理由づけを行なうためには、認知的に成熟(知能が発達)していなければならない。しかし、頭がいいからといって道徳的な理由づけが行なえるとは限らない<sup>4)</sup>」などと論じられているように、認知的能力の発達だけでも十分とはいえない。道徳性は、人間の内面的成長と密接なかかわりをもちながら、深い人間性への洞察をめざし、高い精神性への発達を追究する姿勢が必要だと考えられる。

本論では、抽象思考の発達に伴ない、複雑な精神的成長の過渡期ともいえる青年期に視点をあて、Kohlberg 理論を通じ道徳性の意識について考察したい。

#### 〔I〕

##### 1)

Jersild, A. T. は「人生において生殖作用の成熟する期間(思春期)から身体的成長がほぼとまり、精神能力も児童期からひき続いて発達したものが最大限の成長に達し、あるいはほとんど達した時期、すなわち成人期に達する時期まで<sup>5)</sup>」と青年期を定義している。青年期の年齢的な基準は、生物学的・社会的にとらえられ、研究者により多少の相違はみられるが、天羽<sup>6)</sup>によれば、前青年期(12~15才)、青年期前期(15~18才)、中期(18~20才)、後期(20才~)と分けている。青年期は、心身両側面において生物学的に成長し成熟に至る時代であり、精神的な成長も大きい。自我の発達に伴ない、これまで意識されなかった自分自身の内へと目が向けられ、自分以外とは別の世界にある自分を見つめるようになる。さらに親や家族・教師などの依存から脱し、独立したひとりの人間として自律的な行動の欲求が高まる時期でもある。青年が成長するために経るこのような依存から脱しようとする過程は、Hollingworth, H. L. により Psychological Weaning (心理的離乳)と名づけられ、「青年が成長するために、まず当面しなければならない課題である<sup>7)</sup>」と考えられている。

青年期の道徳意識はこのような精神的成長の背景の中で、自分を見つめ返すという姿勢により、直面する課題と取り組み、同時に個人だけではなく社会という集団の中への適応を求めることにより、より複雑な精神作用と絡み合い Conflict を生じる場面とも出会うことになる。では、このような抽象的論理思考の発達する青年期とい

\* 教育哲学研究室

\*\* 日本女子大学児童学科研究室

う時代を、判断に至るまでの思考過程に注目した Kohlberg 理論は、どう位置づけ、とらえているのだろうか。

2)

Kohlberg は道徳性の発達において、①Preconventional Level (前慣習的水準)、②Conventional Level (慣習的水準)③Postconventional and Principled Level (慣習的以降、原理的水準)の3つのレベルを設定し、各レベルを2段階づつに分けて6段階の過程を示した。その後、この6段階の中に4½段階を加えているのだが、この点が青年期の道徳意識を論じるひとつの焦点になるのではないかと筆者は考える。

はじめ Kohlberg と Kramer<sup>8)</sup>は、青年期において道徳的な発達はほぼ終りに近づき、成人では、道徳性の発達は低い段階の考え方が減り、高い段階の考え方がより安定化の傾向を示すと論じた。その中で、第2レベルの慣習的水準における4段階から第3レベルの原理的水準における5段階の考え方をもって考えられた者が、より低いレベルととらえられる考え方を示すことのある点に注目した。そして「原理的水準での安定化の前に第2段階と似た道徳的快楽主義を示すものがあることが指摘された。…略…原理的水準に向かいつつある者が、非合理的な罪や不安から自分自身を解放しようとするときに起きる一時的な構造的退行である<sup>9)</sup>」と考えた。4～5段階から第2段階へ戻ったと解釈されたのである。しかし、このような現象が高い教育を求める大学生に多くみられる点を含め、青年期という複雑な精神的成長に目が向けられ、その後、Turiel, E. によって「単なる2段階とは異なり、それまでもっていた慣習的モードに疑問をもち、価値の相対性に関し新たな認識を獲得しつつある<sup>10)</sup>」と論じられた。

自我の発達に伴ない、内へと向けられる精神性への追究が、これまでの道徳性に対する考え方に矛盾や疑問を生じさせ、新しい考えを構成しようと模索する姿勢を反映しているのだろう。むしろ青年期に至る前に自我の体験がないわけではないが、青年期以前は、「漠然としたいわばおのずから生きられているにすぎないものであって、自分というものがはっきり対象として意識されることはなかった<sup>11)</sup>」このような青年期の精神的成長の背景に目が向けられ、退行現象ではなく、より深く思索する姿勢があるからこそ生じさせた疑問であり、その結果得られた思考なのだということであろう。

こうした現象について、山岸は次のようにまとめている。「『道徳的な正しさ』は行為者の欲求に基づく相対的なもので、普遍的に妥当なものはないという倫理的相対主義、道徳的理由づけは、行為者の欲求や利益に基づくという倫理的エゴイズムにあり、彼らの考え方は内容的に第2段階に似ているが、しかし道徳を拒否しながらメタ倫理的で、抽象的・哲学的レベルでの反応である点で第2段階とは異なると考えられたのである<sup>12)</sup>」

このように青年期には慣習的水準の考え方から進みつつ、より高いレベルである原理的水準への受容に戸惑う姿勢がそこにあり、ひとつの哲学的模索の時期であるといえるのだろう。発達的にもまさに心身共に成熟に至る過渡期であり、精神的成長による哲学的な意味での抽象性を追究する時期と考えられる。このような移行期を改めて検討し、道徳性の発達段階において Kohlberg は移行水準(Transitional Level)を設定し、それを原理的水準ではないが慣習的水準は越えているものとして、以下のような4½段階を示したのである。

「個人的・主観的であり、良心は任意的で相対的である。義務や道徳的正義の考え方に基づいて行動する。自分自身の社会から脱しているが、一般的行為や社会契約を必ずしも考えず個人的な解決をする。責任は果たすが特別な社会に限定されており、原理的でない<sup>13)</sup>」

Kohlberg は、道徳的発達において思考過程を重視している。この考える姿勢の中で、青年期の特徴である自己への問いかけが、道徳意識にも大きな影響を及ぼしていることは確かである。特に青年期後期においては、「強い情動的要因を伴った個人的経験が、道徳的発達を促すようになる。一略一既存の社会や自己に疑問を投げかけ、新たな原理を模索するという自己の強いかかわりを要する発達過程のためといえよう<sup>14)</sup>」と論じられている。発達は、順次高いレベルへ進むことをめざしているが、経験により、ふと立ち止まりみつめ返す姿勢があってはじめて高いレベルへの開けた道がみえてくるのだろう。その意味で、道徳性の発達における4½段階の設定は、割りきれない人間の複雑な精神的成長を示唆する段階ととらえることができよう。

この4½段階について、Erikson の示した同一性の危機またはモラトリアムに対応するものと解釈されており<sup>15)</sup>、この点については今後さらに考察を深めていきたいと考えている。

3)

青年期には、これまで以上に多くの認知的刺激を受け様々な価値観とのぶつかりを通し、自己をみつめる姿勢の中から、現実社会への批判と同時に現実を受け入れなければならない社会的背景もみえはじめる。しかし、まだ容認できずに戸惑い、Conflictを生じる中で道徳的な意味での価値観への疑問が生じる時期であろう。青年期に生じるこのような道徳意識の背景に、Peters, R. S. が注目した Sensitization のとらえ方がひとつのキーポイントになるように思われる、Peters の考え方は前々論<sup>1)</sup>において考察しているので本論では省略するが、彼は、理性(reason)のもつ Sensitization (感光性)に注目し、「理性の形式性とはなにか善でなにか悪であるのかを感光する作用<sup>16)</sup>」とし、「後にそれは理性的行為に影響する原理として作用する<sup>17)</sup>」と述べている。

青年期に至って感光する作用は、「強い情動的要因を伴った個人的な経験が道徳的発達を促すようになる…<sup>18)</sup>」と述べられた点において重要性をもつと筆者は考える。

成熟に至る過渡期である青年期の段階で、個人的な経験に感光する(Sensitize)作用こそ、道徳意識とかわる問題ではないだろうか。Sensitization は個人レベルにおいて、価値への対応に理性的に対処する“自己”を発見させる要素をもつものではないだろうか。

Kohlberg が心理的思考と哲学的思考の2側面の必要性を道徳論において主張し、この2つの考え方を「異なる方向に展開された同一の理論<sup>19)</sup>」「道徳教育に関し、いやしくも学問的な根拠を持った基本的な一般命題を提出しうる学問分野は、発達の社会心理学と、道徳哲学の2つだけである<sup>19)</sup>」と述べている点についても、Peters の主張する Sensitization に注目することで同一の理論への道がみえるように解されるのである。

道徳性の追究は、人間性への追究でもある。青年期の道徳意識が複雑な精神作用と絡み合い、Kohlberg の示した発達段階にそって単純により高いレベルへ進みえない要素のある点こそ、ひとつの Sensitization と考えられないだろうか。そして、何よりも人間性を示す点であるのかもしれない。

[I]では、発達心理学的側面から青年期の精神的成長と道徳意識について、“移行期”の問題に焦点をあて論じたが、そこには哲学的な意味における人間の普遍性追究への示唆が与えられているように思われる。

[II]

以上の Kohlberg の発達理論と青年期への考察はまことに多くの示唆を与へるものがあるといえよう。前述のように青年期の成長、成熟の時代が成人への飛翔の準備の時期であること。それがひとりの人間として自立せねばならない必然の時期であること。つまり、青年期に直面しなければならない Weaning のときであること。Kohlberg 風と言うならば、慣習的水準を越えるとき、つまり6段階のうち4½に位置するものと指摘されたこと。構造的退行であること。強い情動的要因を伴った個人的経験と道徳的発達の時期であること。

以上のことが青年期を特徴づけるものとして指摘されたのである。青年期についてというよりも、人間の価値の認識過程について、つまり、道徳意識の形成について青年期はなにか示唆を与える重要な段階であることを考察せざるをえないといえよう。価値の認識こそすべての始源である。多くの学問的追迫もこれに集約されるのである。たとえば、Rogers カウンセリング論<sup>20)</sup>のなかでも価値の形成はかぎりなく重要視される。この小論は、Rogers の広大な視界をたのしむに充分なる優れた豊潤な人間関係論であるが、また、道徳論の考察にもよき支援者である。彼もいう。より豊かな人生に向かっていく人間の存在をみつめたのである。第1には、幼児がフレキシブルで変化するものであること。固定したものはなにもない、つまり、幼児は自分にとっての価値を求めて最後に安定と休らぎの世界(security and rest)に入り、再び価値を求めて操作に入る(operative values)。一有機体としての人間は成長とともに外からの無数の価値の混合体にとつくられていく。人間とは自分に投入される(introject)無数の価値の多面体にすぎないと。成人は、とくに現代人は、取り入れた多くの価値をほとんどなんの検証もなく取り入れていくのに精一杯である。かくして急速に無理をしてまで投入された価値は本来の自己のかしこさ(potential wisdom)とはかけはなれたものとなってしまう。つまり現代人のいう根本的な自己疎外(estrangement)である。Rogers は仮説をたてる。前述の方向のない雑多な人間存在に対して、①人間には有機的なベース(基盤)があって、それが有機的価値づけ作用をなす。このベースは生きて世界(the animate world)と共通のものである。②この価値づけ作用は人が他人のなかに進行している経験にひらかれ

ていばいるほど自己実現により効果的である。この2つの命題は彼のカウンセリングの立場からのものであろうが、道徳的命題として考察せねばならないものである。さらに以上の考察が青年期の、つまり4½段階の混乱期への分析への足がかりを与えてくれるのではなかろうか。前述のよう青年が個人的主観的相対的非現実的……という移行の時期ととらえられるのは現象として事実である。しかし Rogers 流に考えれば、急速な価値の投入からの必然の結果と考えられよう。成人達の、やがては原理的な、あるいは複雑きわまりない矛盾した価値の全体へ入る前のたじろぎの時代、自由に選択の可能な時代と青年期を位置づけるべきである。とすれば、4½段階の時期はより積極的な意味を持ち、諸価値を成人期へと整理統合するときであり、矛盾した価値のカオスともいえる成人社会への抵抗のときである。青年期を単なる一階梯とみてしまうのは人間存在を、また、道徳のなりたちをより単純化、形式化してしまうのではないか。青年期にその価値が純粹であればあるほど、成人は豊かな結実が与えられるのかもしれない。

Rogers は価値づけにむかう有機的な基盤をこの生きた世界 (the animate world) と共通なものとした。つまりこの宇宙と共通のなにかが道徳の原理というのである。Pestalozzi も道徳の源泉を人間界に求めることはなかった。彼も、あまりに作意的功利的価値の導入を道徳の原理そのものとはなしえなかった<sup>21)</sup>。それ故にこそ動物的純潔のあふれる道徳以前の世界＝本能に導かれた単純無比な原始人の社会へ、かぎりない憧憬を示すのである。善悪以前の次元が純化の次元として道徳的純粹をよびますということは、一種の矛盾であり、自己破壊である。

Pestalozzi は、人間に与えられた純なるときを誕生の一瞬のみにみるのである。私は、あえて付言したいのは、青年期の価値の退行は成人の価値やら道徳への「秘められた対決のとき」である。2番目に純化されたときと。

以上、Rogers や Pestalozzi のなげかけに有機体構造をどう敷衍するかが私達の課題である。

最後に、Kohlberg の6段階理論を“人間の生命の道徳的価値”に視点をあて、彼の追跡研究によって得られた面接記録<sup>22)</sup>を以下に記すことにする。第4段階から第5段階は16才～20才に対応し、まさに青年期に当たる

ことがわかる。すべての者が必ず青年期にこの段階の道徳意識と対応するとは限らないだろうが、精神的な成長に伴う抽象思考の発達により、ほぼこの時期に対応すると考えられている。それだけに4½段階は、人間の複雑な精神性を示し、「秘められた対決」を自己の中で展開しているといえるのだろう。

第1段階：生命の道徳的価値と生命の物理的価値ないし社会的地位による価値とが未分化。

＜病気で死にそうな女の人が出て、その夫は薬代を払えない場合、薬屋はなぜその女の人に薬をあげなければならないでしょうか＞

10才：ある重要な人物が飛行機に乗っていて、気分が悪くなったとします。もしスチュワーデスが残りの薬は一人分しかなく、後の座席に病気の友だちがいるためにその重要な人物には薬をあげなかったとすれば、そのスチュワーデスは、重要な人物を助けなかった罪できっと刑務所に入れられるでしょう。

＜一人の重要な人物の命を救うほうがよいでしょうか、それともたくさんあまり重要でない人間の命を救うほうがよいでしょうか＞

10才：重要でなくとも全部人です。どうしてかという、一人の人間でも一軒の家とおそらくたくさん家具を持っているけれど、多くの人を合わせるとものすごくたくさん家具になるし、その人たちの中には、そう見えないだけで実際は金持ちの人がいるかもしれないからです。

第2段階：人間の生命の価値は、本人や他の人々の欲求充足の手段と考えられる。命を救うという決断は、本人次第であるとか、その決断は本人がすべきであるとされる。

＜医者には助かる見込みのない病にかかり、痛みを耐えきれず殺してほしいと頼む女性を安楽死させるべきでしょうか＞

13才：もし彼女がそれを求めているとすれば、まさに彼女の気持ち次第だと思います。彼女はひどい痛みを苦しんでおり、ちょうど人がいつも動物を痛みから解放してやるのと同じです。

第3段階：人間生命の価値は、本人に対する家族やその他の人々の共感と愛情に基づいている。

＜第2段階と同じ質問＞

16才：彼女にとって一番いいかもしれないけど、夫にとっては、…人間の命で… 動物とは違うから…、動物

は、人間が家族に対してもつような関係はもっていません。犬に愛着を感じるようになることはできても、人間とは全然違うでしょう。

第4段階：生命は、権利と義務に関する絶対的な道徳的秩序もしくは宗教的秩序の中での位置づけにより神聖なものと考えられる。

<第2・3段階と同じ質問>

16才：わかりません。ある意味で、それは殺人であって、誰が生き誰が死ぬべきかを決めることは、人間の権利でもなければ特権でもありません。神が地上のすべての人に生命を与えたのです。ですから、人を殺すことは直接神から授かったものをその人から奪うことであり、非常に神聖なものを壊してしまうことです。また人間の命は、ある意味で神の一部とも言えますから、それは、神の一部を壊すことになります。どんな人にも神的なものがあると思います。

第5段階：生命は、コミュニティの福祉との関係において尊重され、また、それが普遍的な人間の権利であるという点において尊重される。

<第2・3・4段階と同じ質問>

20才：人間の生命を救う責任を引き受けた医者倫理からすれば、その点からは、彼はたぶん安楽死させるべきではないでしょう。しかしもう1つ別の面があります。いずれ死ぬことがわかっているときに、それは、誰にとっても、当人にも家族にも苦痛であると考えてる人が医学の専門家の間に多くなっています。人間が人工肺や人工肝臓で生きながらえても、それは生きた人間であるより植物に近いといえます。もしそれを彼女が自分で選んだのであれば、人間であるということに伴う一定の権利と特権があると思います。私は人間ですし、ある人生の望みもっています。他の人もみな同じだと思います。人は自分を中心にした世界もっています。そして他の人もみなそうです。その意味で、私たちはすべて平等なのです。

第6段階：個人の尊重という普遍的な人間の価値を表わすものとして、人間の生命は神聖であるという信念。

<夫は妻を救うために薬を盗むべきでしょうか、ただの知人のためだったらどうでしょうか>

24才：盗むべきです。人間の命は、それが誰の命であろうと、他のいかなる道徳的もしくは法律的価値にも優先します。人間の命は特定の個人によって価値を認められようと認められまいと、固有の価値もっています。

<どうしてそうですか>

一人ひとりの人間の固有の価値は、正義と愛の原理があらゆる人間関係の基準となっている価値体系の中でも中心的な価値なのです。

註

- 1) 鈴木 孝・福崎淳子：Kohlberg 理論における道徳性の発達に関する一考察—R. S. Peters およびW. James を通じて—, 東京家政大学研究紀要, 27, 43—51 (1987)
- 2) 鈴木 孝・福崎淳子：幼児の道徳性の形成に関する一考察—L. Kohlberg 理論を通じて—, 東京家政大学研究紀要, 28, 9—14 (1988)
- 3) 山岸明子：コールバーク理論のその後の発展, 道徳性の発達と教育 (永野重夫編), 新曜社 (東京), 1985, p. 195
- 4) Kohlberg, L. : From is to Ought, How to commit the naturalistic fallacy and get away with it in the study of moral development, In Mischel, T. (Ed), *Cognitive development and epistemology*, Academic Press, 1971, 内藤俊史訳：「である」から「べきである」へ, 道徳性の発達と教育 (永野重史編), 新曜社 (東京), 1985, p. 57
- 5) 天羽大平：青年心理学, 日本女子大学通信教育部 (東京) 1982, p. 1
- 6) 同上 p. 4
- 7) 藤永保他：青年心理学, 有斐閣 (東京), 1978, p. 27
- 8) Kohlberg, L. & Kramer, R. : Continuities and discontinuities in childhood and adult moral development, *Human Development*, 1969, 12 93—120
- 9) 山岸明子：p. 208 (1985)
- 10) 同上 p. 209
- 11) 藤永保他：p. 13 (1978)
- 12) 山岸明子：p. 209 (1985)
- 13) Kohlberg, L. : *The Philosophy of Moral Development, Essay in moral development*, vol. 1. Harper & Row, San Francisco, 409—412 (1981) [Carter, R. E. : Appendix in De-

- mensions of moral education, University of Toronto Press, 205 (1984)]
- 14) 山岸明子 : p. 210 (1985)
  - 15) 同上 p. 209
  - 16) 鈴木孝 : 現代イギリスの道德教育論 (1) —R. S. Peters の場合—, 東京家政大学研究紀要, **26**, 213 (1986)
  - 17) 同上 215 (1986)
  - 18) 内藤後史訳 : p. 6 (1985)
  - 19) Kohlberg, L. : Moral Stages & Moral Education, 岩佐信道訳, 道德性の発達と道德教育, 広池学園出版部 (千葉) 1987, p. 59
  - 20) Rogers, C. : Toward a Modern Approach to Values, *Person to Person* 1967, 13—28
  - 21) Pestalozzi : *Meine Nachforschungen* (探究) (1797)
  - 22) Kohlberg, L. : 岩佐信道訳 pp. 175—177